

ゾルゲ事件関係外国語文献翻訳集

No.38

特集「ゾルゲと上海情報戦国際フォーラム」



2013年12月

日露歴史研究センター事務局 編

目 次

上海でゾルゲ事件国際シンポジウム開く	1
中国国内で学術的なインテリジェンス研究が進む 日本、総勢25人から成る大型代表団を現地に派遣	
中国側報告 (抄訳)	
ゾルゲと上海(1930 - 32)	6
蘇 智 良 (上海師範大学教授)	
上海におけるゾルゲーコミンテルン解禁文書を中心に	8
邵 雍 (中国現代人物研究專業委員会秘書長、上海師範大学教授)	
銭明、肖心正口述：回想の中の中西功と「中共諜報団事件」	9
陳 正 卿 (上海市档案馆研究館員)	
反戦スパイ作家 陶晶孫	10
高 建 国 (上海現代管理研究センター研究員)	
ロシア側報告 (抄訳)	12
リヒアルト・ゾルゲの諜報活動—中国におけるゾルゲ諜報団とその諜報結果(1929 - 32年) ナターリヤ・L・ママーエワ (ロシア科学アカデミー極東研究所主任研究員)	
ブランコ・ド・ブケリチの息子ポールさんが、オーストラリアから参加	15
社会運動資料センター代表 渡部富哉	
日本側報告	17
国際情報戦としてのゾルゲ事件 加藤哲郎 (早稲田大学客員教授)	
[I] 外国語文献翻訳 編	
ミハイル・アレクセーエフ著『あなたのラムゼイ リヒアルト・ゾルゲと 中国におけるソ連軍事諜報機関 1930-1933年』より抜粋 (X)	34
特務機関の昨日と今日 上海 (1931年1月～9月) 4.2 「ゾルゲがアンリ釈放のためにあらゆる手段を講ずるよう、上海宛に指令の発信をお願いします」 (アブラーモフよりベルジン宛=つづき)	
[II] 日本語研究論文 編	
通信の分野から見たゾルゲ事件	49
ノンフィクションライター 坂田 正次	
特定秘密保護法案について思う	58
評論家 来栖 宗孝	
新刊紹介 新訳・追補版 チャルマーズ・ジョンソン著『ゾルゲ事件とは何か』	63
「東亜新秩序社会」の建設を構想した尾崎秀実	

表紙の写真 マクス・クラウゼン夫妻 1965年、ソ連政府はマクスに赤旗勲章、アンナに赤星勲章を授与した。

上海でゾルゲ事件国際シンポジウム開く

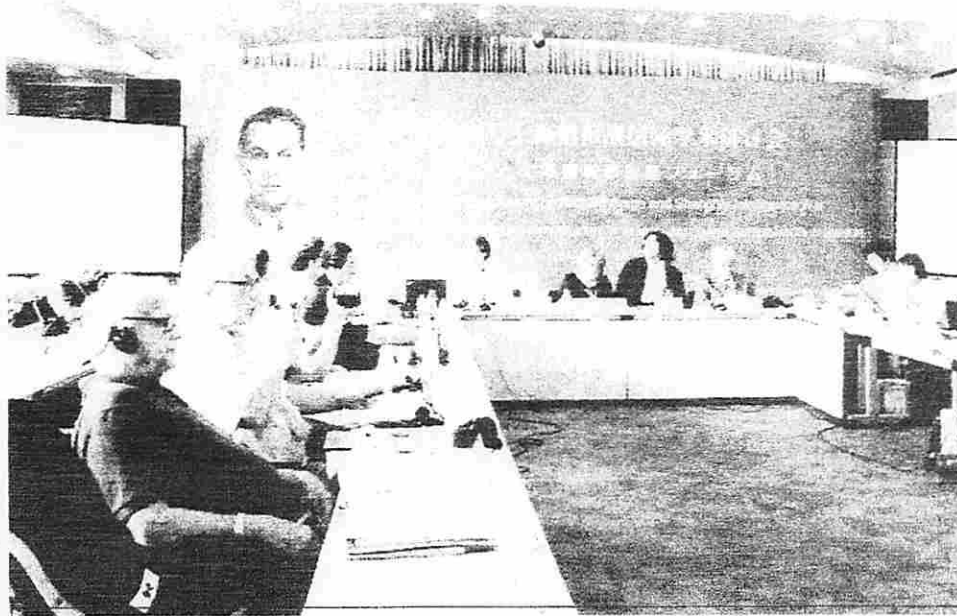
中国国内で学術的なインテリジェンス研究が進む 日本、総勢25人から成る大型代表団を現地に派遣

「ソ連軍事諜報員リヒアルト・ゾルゲは、国際情報戦をどのように闘ったか」— 2013年9月15、16両日、中国・上海の上海師範大学国際教育センターで、国際シンポジウム「ゾルゲと上海情報戦国際フォーラム」が開かれた。日露歴史研究センターの呼びかけで、中国側は上海師範大学、日本側は当センターのほか、早稲田大学20世紀メディア研究所、愛知大学国際中国学研究センターが共催した。

この上海シンポジウムは、日露歴史研究センターが1998

年11月に東京で開いた第1回ゾルゲ事件国際シンポジウムから数えて、7回目になる。日露歴史研究センターはこれを記念して、上海シンポジウムに総勢約25人から成る大型の日本代表団を送り込んだ。一方、地元の中国から約50人、またロシアから3人、韓国から1人が参加した。このほか、今回はゾルゲ諜報団の有力メンバーの1人であった、ブランコ・ド・ブケリチ（元アバス通信記者）の子息で、現在、オーストラリアに住んでいるポール・ブケリチ氏ら関係者5人が参加して、大きな話題になった。

上海はゾルゲとその盟友である尾崎秀実が朝日新聞上海支局員であるとき、初めて出会って、ともに革命を夢見ながら、コミュニストとして固い契りを結んで、諜報活動を行なった由緒ある地。「ゾルゲ事件」の国際的な共同研究を進めてきた日露歴史研究センターはかねてから、これにちなんで上海で国



上海師範大学で開催された国際シンポジウム会場の情景
報告者（中央）は、ロシア側発表者ママーエワ女史左手前はオーストラリアから参加のポール・ブケリチ氏
（川田博史撮影）

際シンポジウムを開く計画を立て、中国側関係機関と折衝を重ねてきた。しかし、格好な提携先がなかなか決まらず、中国以外の諸都市で開催する状況が続いた。それが急遽、上海での開催が決まったのは、中国側に太い人脈を持つ愛知大学国際コミュニケーション学部長鈴木規夫教授の斡旋によって、上海師範大学が国際シンポジウム開催の受け入れを承諾したことによる。

日中関係は昨年来、尖閣諸島問題や歴史認識問題が足かせとなって、両国の首脳会談を正式に開くことができないなど、1972年の日中国交回復以降、最悪の状態が続いている。それにもかかわらず同大学がシンポジウム開催の積極的な受け入れを表明したのは、中国国内で学術研究の一定の自由化が進み、諜報問題のような政治的に極めて敏感な分野についても、外国との共同研究ができる機運が生まれてき

たものと見られる。わが国のインテリジェンス（情報・諜報）問題の研究者として知られる、山本武利早稲田大学名誉教授は、「中国でもインテリジェンス問題について、学問的に組織して研究を行なう動きが、急速に高まってきているようだ」と指摘している。そのせいか、中国のマスコミも今度のシンポジウムには大きな関心を寄せて、テレビや新聞が会場で積極的な取材活動を行なうのが目立った。

欧米列強や日本が中国で、植民地支配を進める中で、外国人が行政権と警察権を握る「租界」がいち早く開設された上海は、他の諸都市より国際化が一段と早く進んだ。この関係で、1920年代から30年代にかけて、欧米列強と日本、中国国民党、中国共産党、北洋軍閥などの各勢力が入り乱れて、果敢な「諜報・情報戦」が展開された。

とりわけ1931年9月18日、日本の関東軍による軍事謀略、奉天（現在の瀋陽市）近郊の柳条湖付近の南満州鉄道（満鉄）線路の爆破に端を発した満州事変と、その翌年の満州帝国の建国は、中国東北部に国境を接するソ連や欧米列強に強い衝撃を与え、日本の中国侵略の意図やその展開を探ろうとする諜報・情報収集活動がとりわけ上海で盛んになっ

た。こうした中で、ソ連労働赤軍参謀本部の諜報機関（同4部）から中国の現地に派遣されたゾルゲは、尾崎の献身的な協力を得ながら、上海で諜報・情報工作を行なって、大きな成果をあげた。

今回のシンポジウムは、上海で展開された国際諜報活動・情報戦争に焦点を当てながら、学術的な探求を行なうものであったが、内容自体が極めて政治的で、かつまた極めて過敏な性格を帯びざるをえなかった。しかし、討議そのものは、感情的になることもなく、学術的な検証と各種情報の相互交換に終始して、トラブルは何も起きることはなく、日中学术交流の成果をあげることができた。

シンポジウムは、開幕の冒頭に、共催者を代表して、中国側は蘇智良上海師範大学教授、日本側は鈴木規夫愛知大学中国学研究センター所長、白井久也日露歴史研究センター代表、土屋礼子早稲田大学20世紀メディア研究所所長らがそれぞれ挨拶。その後、日・中・露3国の研究者の各種報告が行なわれたのち、実質的な討論に入った。会議はすべて日本語、中国語、ロシア語、英語の4カ国語によって、同時通訳された。

日本側の報告

- ◎「国際情報戦としてのゾルゲ事件」
（加藤哲郎 一橋大学名誉教授）
- 「太平洋戦争前の日本2大紙における中国関係の組織と記者」
（土屋礼子 早稲田大学教授）
- 「朝日新聞と中国—日中戦争期での国策新聞『大陸新報』」
（山本武利 早稲田大学名誉教授）
- 「満州諜報団事件の解禁された記事とゾルゲ事件の驚くべき真相」
（渡部富哉 社会運動資料センター代表）
- 「1920～40年代の上海における intelligence 概念の革新」
（鈴木規夫 愛知大学教授）
- 「アグネス・スメドレー：1930年代の上海におけるその情報活動」
（白井久也 日露歴史研究センター代表）

中国側の報告

- ◎「ゾルゲと上海 1930-1932年」
(蘇智良 上海師範大学教授)
- 「ゾルゲと上海ユダヤ人お左翼地下反ファシズム集団」
(潘光 上海市世界史学会会長)
- ◎「上海におけるゾルゲーコミンテルン解禁文書を中心に」
(邵雍 上海師範大学教授、中国現代人物研究專業委員会秘書長)
- 「上海と東京 尾崎秀実の情報活動の起点と終点」
(徐静波 復旦大学日本研究センター教授)
- ◎「銭明、肖心正口述：回想の中の中西功と“中共諜報団事件”」
(陳正卿 上海市档案馆研究館員)
- 「上海都市における共産党革命闘争の意義 1921-1949年 都市社会史の考察」
(熊月之 中国史学会副会長)
- 「抗日戦争期の上海特科における日本情報工作」
(銭明 中央特科幹部)
- 「ヌーラン事件の再研究」
(張姚俊 上海市档案馆館員)
- 「30年代初頭におけるゾルゲグループと宋慶齡の政治活動関係の1考察」
(朱玖琳 上海市孫中山 宋慶齡文物管理委員会研究室)
- ◎「反戦スパイ作家 陶晶孫」
(高建国 上海現代管理研究センター研究員)
など。

ロシア側の報告

- ◎「リヒアルト・ゾルゲとその諜報団の中国における諜報活動(1929-1932年)」
(ナターリヤ・L・ママーエワ ロシア科学アカデミー極東研究所上級研究員)
など。

-----お知らせ-----

シンポジウムで発表された報告は数が多いうえ、各報告とも長尺のため、本誌に一举掲載することができません。そこで日露歴史研究センター事務局が『翻訳集』読者にとって興味があると思われるものを選択したうえ、翻訳も含めて編集して、今号ならびにそれ以降の号に適宜、掲載することにしました。第1回は中露両国の報告(上記◎印)と加藤哲郎教授の報告です。

なお、白井久也日露歴史研究センター代表ら上海シンポジウムの日本人参加者18人は、シンポジウム終了後チームを組んで、9月16日から8日間の日程で西安、嘉峪関、敦煌、トルファン、ウルムチなど西域(シルクロード)を旅行しました。

上海シンポジウム参加者

日本側 (50音順)

- 東 多喜子 (元ミール・ロシア語研究所代表)
伊藤 淳 (伊藤律遺児。元民医連職員)
今西 光男 (日露歴史研究センター幹事。元朝日新聞政治部副部長)
上里 佑子 (日露歴史研究センター幹事)
越前谷 義博 (元商社員)
加藤 哲郎 (早稲田大学客員教授)
川田 博史 (日露歴史研究センター事務局長。元高校教員)
顧 令儀 (愛知大学国際中国研究センター研究員)
斎藤 良和 (日露歴史研究センター幹事。元時事通信北京支局長)
篠崎 務 (日露歴史研究センター幹事、英語翻訳家)
渋沢 直次 (日露歴史研究センター会員。元会社役員)
渋沢 治子 (日露歴史研究センター会員)
白井 久也 (日露歴史研究センター代表。元朝日新聞編集委員)
鈴木 規夫 (愛知大学国際中国学研究センター教授)
多田 正子 (元中国・延安大学日本語講師)
土屋 礼子 (早稲田大学 20 世紀メディア研究所所長)
長谷 みどり (日露歴史研究センター会員。元日比谷図書館、都立美術館課長代行)
増田 興一 (日露歴史研究センター幹事。元高校教員)
村井 征子 (日露歴史研究センター幹事。元民主新聞記者)
柳澤 徳次 (日露歴史研究センター幹事、日本モンゴル親善協会会長)
山下 靖典 (日露歴史研究センター会員。元朝日新聞政治部記者)
山本 武利 (早稲田大学名誉教授)
山本 規雄 (翻訳・編集者)
吉田 臣吾 (日露歴史研究センター幹事。通訳・翻訳家)
渡部 富哉 (日露歴史研究センター幹事、社会運動資料センター代表)

中国側 (主な人。付：韓国)

- 蘇智良 (上海師範大学教授・同大学人文学院院長・中国現代人物研究專業委員会主任)
邵 雍 (中国現代人物研究專業委員会秘書長・上海師範大学人文学院教授)
熊月之 (中国史学会副会長・上海市歴史学会会長)
潘 光 (上海市世界史学会会長・上海ユダヤ研究センター主任)
臧志軍 (復旦大学国際関係・公共事務学院教授)
徐静波 (復旦大学中日関係研究センター教授)

呉基民（中国報告文学協会会員・上海作家協会会員・上海東方移動電視番組編集センター副総編集）

張姚俊（上海市檔案局幹部・編研処研究員）

陳正卿（上海市檔案館研究員）

高建国（上海市現代管理研究センター研究員）

牛玖琳（上海市孫中山宋慶齡文物管理委員会研究室研究員）

洪小夏（女性、上海師範大学法政学院教授）

張曉宏（黒竜江省人民政府外事弁公室副主任）

徐 青（女性、浙江理工大学外国語学院教師）

田 涛（中国国際友人研究会副秘書長）

郭沂濱（女性、韓国水原大学教養学部中国語教授）

ロシア側

ナターリヤ・L・ママーエワ（女性、ロシア科学アカデミー極東研究所主任研究員）

ほか2名

オーストラリア側

ポール・ブケリテ

ほか4名



上海シンポジウムに参加した人たち 蘇智良上海市師範大学教授（前列左から6人目）提供

国際情報戦としてのゾルゲ事件

2013年9月15日 上海師範大学

早稲田大学 加藤哲郎

1 松本清張『日本の黒い霧』中国語訳の功罪

20世紀後半の日本で活躍した、松本清張(1909-1992)という作家がいる。九州の高等小学校を出て印刷工など多くの職業を体験、第2次世界大戦中は朝鮮半島に歩兵として従軍、敗戦後朝日新聞社で広告の仕事をしながらかつて文学を志し、1953年に「或る『小倉日記』伝」で日本の新人作家の登竜門である芥川賞を受賞した。以後、数々の小説、特に推理小説を通じて社会の矛盾を問う社会派推理小説という文学ジャンルを確立し、古代史から現代史にいたる歴史ドキュメントも手がけた。推理小説の代表作『点と線』(1958)は、幾度も映画・テレビでドラマ化され、米国の初代CIA東京支局長ポール・ブルムにより英訳された(*Points and Lines*, translated by Paul Blum, 1970)。その後フランス語、ドイツ語、イタリア語、ギリシャ語、チェコ語、フィンランド語、エストニア語、ロシア語、ブルガリア語、アルメニア語、韓国語、中国語と13カ国語に翻訳されている。

中国語版『点と線』は、1977年香港天地図書有限公司版以来幾度か中文訳され、2010年の南海出版公司版、林青華他訳は「全球三大推理宗師之一松本清張成名傑作」、すなわち「世界3大推理作家の一人の傑作」と宣伝されている。

清華大学日文科王成教授の日本での講演記録によれば、『点と線』は中国で最初に紹介された西側諸国の推理小説で、「推理小説」という言葉自体が日本語から中国語になったという。また1979年訳(香港版は1977年)の『点と線』は、中国で最初の松本清張作品であり、①この頃はまだ文化大革命の影響が残ったままで、出版社は西側資本主義国家の作家の作品を出版して政治的に影響を受けるのを恐

れ、裏表紙に「内部発行」という字を印字した、②中国公安局がこの本を犯罪捜査の参考に使った、③この本の翻訳者「晏州」が誰なのかは未だに不明、と解説したという。その他『砂の器』は1980年に映画の上映から翻訳が広がり、『球形の荒野』中国語訳は当初は売れなかったが、2012年に『一個背叛日本的日本人(日本を裏切った日本人)』と改題してから、爆発的なベストセラーになったという。

ただし松本清張の作品全体の中国語訳でいうと、文革前の1965年に作家出版社から文若若訳『日本の黒霧』が出ている。訳者の文若若は芥川龍之介から三島由紀夫まで日本文学を多数翻訳しており、『日本の黒霧』は、1980年には外国文学出版社から、2012年には中国人民文学出版社からも出版されている。

文若若訳は、もともと1960-61年に雑誌『文藝春秋』に連載された日本語原本『日本の黒い霧』全12編のうち、帝国銀行事件、下山事件、松川事件、白鳥事件、ラストボロフ事件、謀略朝鮮戦争、の6編を編んだ文藝春秋新社1962年日本語新訂初版を底本とし、それにシリーズの木星号遭難事件を加えて7編を編集・訳出したものようである。訳出されなかったのは、昭電・造船疑獄、征服者とダイヤモンド、鹿地亘事件、追放とレッドページ、それに、ゾルゲ事件と関わる「革命を売る男・伊藤律」である。

40年の作家生活のなかで、松本清張は700以上の作品を残した。日本ではその多くが今日でも受け継がれ、ロングセラーとなっている。清張の作品が中国の読者に広く読まれることは、日中文化交流の一環として、一般的には喜ばしいことである。例えば、

ある中国語文ウェブサイトの「松本清張と小説」というエッセイは、「清張ミステリーは数々の名作が1950年代後半から1960年代に書かれ、日本の『高度成長の時代』を背景にしている。1990年代以降の中国は日本の高度成長期と良くも悪くも似ているようになった。そういう社会背景を持った読者は清張ミステリーにより多いに共鳴を感じた」、「市場経済の時代に、政治と文学を主流とした中国の文学は大衆の趣味に迎合されなくなった。政治イデオロギーに縛られてきた文学観は市場経済の波にさらされ無力感を見せている。今までは通俗文学を軽んじてきた学者も大量に流通している通俗文学(探偵小説)に目を向けるようになった」、「高度成長期の中国の読者はこの小説『点と線』から読み取れるものは、やはり、官僚と商人が結託し、汚職の摘発を防ぐために、部下を犠牲にする残虐な陰謀であろう。官僚と商人が結託して経済利益にとどまらずに殺人までも及んだ犯罪は、もう日本社会の個性でなくなり、経済社会の持病と認識されるようになった」、「清張ミステリーが中国の読者に与えたのは、高度成長期に起きた社会の諸問題を社会機構や人間性からその動機を読み取る方法である」と、かつて松本清張が推理小説として描いた社会の病理が、現代中国で他人事ではなくなった点に、「清張ミステリーが中国で広く読まれる」根拠を見出している。

『人民網』日本語版 2012年11月28日版には、「台湾作家が語る松本清張『日本人の罪を曝く』」という「台湾著名作家 楊照」の談話が掲載されている。「もし清張の全体的な作風を代表する一作を選ぶとしたら、個人的には必ず『日本の黒い霧』を選ぶ。日本を覆う黒い霧の存在を認めることが清張の執筆の原点といえる。この黒い霧を払いのけ、日本人に自己の醜い一面を認識させることこそ清張の使命だった」と述べたうえで、その役割は20世紀日本最高の知識人というべき政治学者丸山眞男と比肩するという。「日本の政治思想家、丸山眞男氏は、戦後はばかりことなく『天皇制』を批判し、日本の政治文化における戦争責任を追及した、非常に得難い『良心の鏡』だ。同じ角度から見た場合、清張と

丸山眞男は同じ役割を演じている。清張の『良心の鏡』は、日本人を覚醒させるのではなく、真実に気づいているのに、それから目をそらし無関心を装っている日本人に警鐘を鳴らすことだった」と。どうやら中国では、松本清張『日本の黒い霧』は、戦後日本の暗部を描いた傑作とされているようである。

中国の読者にとって、松本清張『日本の黒い霧』を通じて、第2次世界大戦後の日本の歴史と、その経済成長の「光と陰」を学ぶことは意味があるだろう。連合国占領期における連合国軍最高司令官総司令部(GHQ)内部での民主化を担ったGS(民政局)と諜報活動中心のG-2(参謀第2部)の対立、中国革命や朝鮮戦争の日本へのインパクト、日本における保守政治と経済復興の密接な関係、そのなかでの政財官エリート支配層の汚職・腐敗・陰謀、等々の叙述は、中国内戦から中華人民共和国建国期の日本を知る手がかりになるだろう。

しかしながら、『日本の黒い霧』を無批判に読むことは、学術的には問題がある。松本清張は、史実にもとづくドキュメンタリーと称しながら、随所に推理小説作家としてのサービスを盛り込むことによって、ノンフィクションとフィクションの境界が曖昧になっている。学術論文のような綿密な資料批判や典拠の明示・注解があるわけではなく、史実と推理が入り交じっている。しかも、日本では反米・民主主義擁護の社会運動の頂点である日米安保条約改定反対闘争のさなかである、1960年という執筆時点の歴史学の水準と各国公文書が未公開の段階での資料的限界をも反映している。

そのため例えば、連載最終回に全体のまとめ的な意義を与えられた「朝鮮戦争」(中国でいう「抗美援朝戦争」)を、松本清張は米国と韓国軍による「謀略」として描いた。1960年執筆段階では国際的に論争があり、日本の歴史学でも米軍・韓国軍による北進説が強かったとはいえ、今日ではソ連崩壊後の秘密資料公開や米国側の機密解除資料にもとづき、ソ連のスターリンの承認を受けた朝鮮民主主義人民共和国(北朝鮮)金日成による武力統一政策による

侵攻であったことが、国際的に認められている。

1954年1月に駐日ソ連代表部（日ソ国交回復前の事実上の駐日ソ連大使館）のラストボロフ2等書記官（ソ連内務人民委員部 NKVD の中佐）が米国中央情報局（CIA）の手引きで米国大使館に逃げ込み米国に亡命した「ラストボロフ事件」についても、もっぱら米国によるソ連諜報員獲得の手法に焦点があてられ、公安警察資料（警視庁公安部『ラストボロフ事件・総括』1969）には詳しく出ている日本

外務省職員やシベリア抑留帰還者に対するソ連側の諜報工作については、「内容の空疎な猿芝居」と簡単に片付けられている。

つまり、半世紀前に書かれた松本清張『日本の黒い霧』は、1945-55年頃の日本で起きたさまざまな未解決「事件」を、おしなべて「米国諜報機関の陰謀」として描く傾向があり、今日の第1次史料にもとづく学術研究の水準からすれば、「フィクション」として読まれるべき推理が数多く含まれている。

2 松本清張「革命を売る男・伊藤律」説の崩壊

中国で広く流布している、松本清張『日本の黒い霧』の歴史的限界と学術的問題点を指摘したのは、ほかでもない。この問題がゾルゲ事件に関わり、日中両共産党間関係に触れるためか中文『日本の黒霧』には入っていないが、日本語版では目玉の1つとなっている「革命を売る男・伊藤律」という作品が、最近史実と異なると確認されたからである。

松本清張により「革命を売る男」「スパイ」と名指しされた元日本共産党幹部伊藤律は、朝鮮戦争期の日本共産党内部の党内抗争により「スパイ」とされ、中国の監獄に27年間幽閉された後1980年に帰国した。その後の証言・研究・新資料公開等で、「スパイ」ではなく冤罪であったことが明らかにされ、伊藤律の遺族の抗議で、日本語版『日本の黒い霧』を発行する文藝春秋社が、現在販売中の文春文庫第16刷から「作品について」という断り書きを入れて訂正する改訂版となった。

資料として添付した『東京新聞』2013年5月28日夕刊記事（次ページ【資料1】参照）に詳しいが、伊藤律によってゾルゲ事件の糸口がつかまれたというストーリーは、もともと日本の特高警察の手で作られたものだ。ゾルゲ事件は日本共産党員伊藤律の戦前治安維持法事件での検挙のさいの供述から発覚し、そこから北林トモ、宮城与徳、尾崎秀実、リヒアルト・ゾルゲらの検挙につながったという説（伊藤律発覚端緒説）が生まれた。戦後はGHQ（連合国軍最高総司令部）・G-2（参謀第2部）ウィロ

ビー少将らによる米国陸軍省発表（1949年2月）が、当時日本共産党農民部長で徳田球一書記長の懐刀になっていた伊藤律を、政治的に陥れるために利用したのである。

そのさい重要な役割を果たしたのは、1930-33年頃に上海でゾルゲ、スメドレー、尾崎秀実と共に活動したと称していたゾルゲ事件被告川合貞吉であった。ゾルゲ、尾崎の絞首刑をはじめ、多くの被告が日本の敗戦を待たずに獄中で生命を落としたもともと「支那浪人」であった川合は、戦後は作家・評論家となり、「上海ゾルゲ事件についての唯一の生き残り」と称して、ゾルゲ事件について語るようになった。

G-2 ウィロビー少将は、GHQのCIS（民間諜報局）を通じて早くからゾルゲ事件の資料を集め、ソ連との冷戦のなかで政治謀略に使おうとした。米国内ではアメラシア事件、ハリウッド「赤狩り」などいわゆるマッカーシズムが始まっており、ウィロビーとCISポール・ラッシュ中佐は、中国革命に理解を示すアメリカ人ジャーナリストを「非米活動」として告発しようと狙っており、とりわけゾルゲ、尾崎秀実と上海で親しかったアメリカ人作家アグネス・スメドレーをターゲットにしていた。

1949年2月のウィロビー報告にもとづく米国陸軍省の発表のさい、「ソ連のスパイ」と名指しされたスメドレーは猛然と抗議し、ワシントンの陸軍省は「手違い」だったと謝罪し、発表そのものを取り

昭和史に残る国際スパイ事件のソルゲ事件。その摘発の端緒は、共産党元幹部伊藤律の密告だった。伊藤の生誕百年に当たる今年、通説とされてきたこの「伊藤スパイ説」が事実上、覆された。



伊藤律氏(1913年9月4日生まれ) 1980年9月4日帰国した伊藤律氏(左)と成田空港で送迎した次男の淳(右)。

伊藤律スパイ説修正 内部文書発掘で判明

捜査関係者ら「ねつ造断言」 ネタもと→G H Qスパイ

「よつやへん」まで来たかという思い。『労働者生活四十五年』の自分にはよくやったかな。渡部富哉さん(ミ)は話す。元共産党員。戦後しばらくして党から離れたが、旋盤工として働き、労働運動に携わってきた。一九八五年二月、共通の知人の葬式で、偶然、伊藤と知り合い親交を深めることになった。中国での二十七年の投獄

伊藤を「革命を売る男」と指摘した松本清張の『日本の黒い霧』に発行元の文芸春秋が異例の断り書きを入れたことになったからだ。この通説はとうとう突き崩されたか。(森本智之)



会見する渡部富哉さん(左)と伊藤律の次男の淳さん(右) 東京都内で

め、国際シンポジウムを二年おきに開催するなどして資料の発掘を進めたのだ。そこで新たに分かったのが、捜査を指揮した特高の係長がまた事件の進行していた当時、内部研修会で発表した内容だ。係長は「事件の検挙全体が伊藤の口一つから出たか」と断言。さらに「伊藤はこちらの内偵線(スパイ)によって分かっている問題については一言も言わない」などと述べ、別の特高側スパイにより、事件の情報を得ていたことを暴露していた。この係長は戦後、伊藤スパイ説を証言した張本人だった。そもそもスパイ説のきっかけは、米國が四九年、発表した「ソルゲ事件の真相」という報告書。共産党も伊藤を除名処分とし、その後、ソルゲ事件で死刑となった日本人協力者尾崎秀実の異母弟で評論家の秀樹が『生きていたユダ』を執筆。清張もこれに続き、通説として広まった。一橋大の加藤吾郎名誉教授(左)が発掘した米公文書は秀樹の「ネタもと」が、金で雇われたG H Q(連合国軍総司令部)のスパイだったことを明らかにした。この人物は秀実の元同志でソルゲ事件の生き残りとして、秀樹に情報提供したが、加藤氏は「G H Qから月二万円で雇われ、伊藤律を『革命を売る男』に仕立て上げた」と指摘する。

一連の調査について、映画「スパイ・ソルゲ」を監督した篠田正浩さん(左)は「驚くべき内容で、九割方書き直していた脚本を二から書き直した」と振り返る。研究者の間では、既にスパイ説は大きく揺らいでいたが、今回、文芸春秋に訂正を申し立てたのは遺族が共産党員から退いたことによる。律は「いずれ真実が明らかになる」と言い残して亡くなった。次男の淳さん(右)は「二番の理解者の母も十年前に八十三歳で亡くなった。これからの父の生涯を本にまとめた」と話した。渡部さんは「律は、中国で投獄されたのは『野坂参三の謀略』と話していた。今度は野坂の闇を解明したい」と話した。

目した。面目丸つぶれのウィロビーは、上海でのス
メドレーがゾルゲ、尾崎秀実と親しかったことを米
国下院非米活動調査委員会で証言させるため、川合
貞吉に月2万円（当時の銀行員初任給は3千円）の
手当を与えてG-2の情報提供者に仕立て上げた。

川合は、ゾルゲ・尾崎秀実・スメドレーとの上海
での「4者会談」をコミンテルンのスパイ活動とし
て証言したばかりでなく、伊藤律が戦前ゾルゲ事件
に関わったうえに戦後は事件の真相を日本共産党内

で繰りつぶそうとしている、とウィロビーの諜報機
関に対して、伊藤律を用いて共産党内を攪乱する謀
略を申しでた。米国側は、川合が証言をくつがえさ
ないように月2万円の手当でゾルゲ事件情報・日本共
産党情報を定期的に報告させる一方、米軍ポール・
ラッシュ中佐らとのツーショット写真【資料2】を
証拠として保存し、川合がソ連・日本共産党側に寝
返らないよう監視を続けた。



DECLASSIFIED
ON 06/14/2008
BY SP-6 BTJ/STP
KEYA SKP VQ
PERS/STP

Mr. KAWA, Specialist
Capt. 1st, Air-For-Gen,
Mitsubishi,
Serial number No. 195

with Lt. Col. Paul RUSH
G-2 Sec, USAF

Identified with G-2, USAF representatives this date as Sorge Case and
has given details in connection with Sorge and Sorge. Mr. Kawa was
tried, convicted and sentenced by Jap Court for his activities with
Dr. Richard Sorge. He was released from Jap prison by U. S. occupation
forces in 1945.

19 February 1949

I certify that this picture was taken on 19 February 1949 and is of
the person or persons listed above.

Lawrence G. Smith
Lawrence G. Smith
G-2 USAF

Registered in the Control Files, G-2 Sec, USAF.

【資料2】写真は、川合貞吉（右）と元GHQ情報将校ポール・ラッシュ。（1949年2月19日付）

川合は本郷ハウス（旧岩崎別邸）を本拠とした「キャノン機関」に、情報を提供していた。2009年夏、
筆者は米国国立公文書館（NARA）所蔵「日本帝国戦犯記録」中の陸軍情報部（MIS）「川合貞吉ファイル」
から上記資料を入手した。

もともと川合が「革命を売る男」として米国議会
で証言をする前に、アグネス・スメドレーは病没し、
日本共産党はソ連共産党・中国共産党からの「コミ
ンフォルム批判」をめぐり党そのものが分裂した。
朝鮮戦争開戦前に地下活動に迫りやられ、極左的戦
略・戦術を採択して政治的に自滅し、徳田球一・野

坂参三ら党幹部は中国に渡って、いわゆる「北京機
関」を作った。伊藤律も当初「北京機関」に属した
が、後ろ盾であった徳田球一が病没し、野坂参三ら
が伊藤律を改めて「スパイ」と告発・認定すること
により、1955年の日本共産党第6回全国協議会（6
全協）に野坂らが帰国し伊藤の除名が決定されても、

伊藤は中国共産党に身柄が預けられ、27年間の監獄生活を強いられた。

ゾルゲ事件及び伊藤律発覚端緒説について、日本でよく読まれてきたのは、尾崎秀実の異母弟である文芸評論家尾崎秀樹の著作『ゾルゲ事件』（中公新書、1963）である。尾崎秀樹は松本清張『日本の黒い霧』（文藝春秋社、1960）以前に『生きているユダ』（八雲書店、1959）を書いて、ゾルゲ事件の伊藤律端緒説のみならず、戦後占領期の伊藤律についてもGHQのスパイではないかと疑い告発していた。

その根拠は、尾崎秀樹が「ゾルゲ事件の生き残り」として信頼し、兄事していたゾルゲ事件被告川合貞吉の証言だった。川合貞吉『或る革命家の回想』（日本出版協同、1953）は、上海でのゾルゲ・尾崎・

スメドレーと一緒に会った「4者会談」の記録のほか、いかに自分が尾崎秀実と共に上海・北京・天津・東京で日本の侵略戦争に反対して活動したかを、英雄伝風に書いていた。

これらを主たる素材とした松本清張「革命を売る男・伊藤律」は、尾崎秀樹・川合貞吉の書物・証言をもとにして、伊藤律が戦前は特高警察の、戦後はGHQから日本共産党に送り込まれた「スパイ」である、と推理するものであった。松本清張の役割は、戦前特高警察、戦後GHQウィロビー報告、それを基礎づける川合貞吉証言、尾崎秀樹の告発、それに松本なりの日本共産党「50年分裂問題」の解釈を加えて、伊藤律ゾルゲ事件発覚端緒説、戦後GHQスパイ説をノンフィクションとして構成し、広めることであった。

3 日本におけるゾルゲ事件研究の歴史的展開

日本におけるゾルゲ事件のイメージと研究は、戦後1946年の尾崎秀実『愛情は降る星のごとく』の刊行から始まった。1945-49年期には、侵略戦争の反省、GHQによる日本の非軍事化・民主化、日本国憲法制定と極東軍事裁判による戦犯追及の流れの中で、ゾルゲ諜報団の活動を、国際的な反戦・反ファシズムの活動の中で評価する動きが強かった。「国際スパイ団」として読み物にする雑誌や新聞記事もないわけではなかったが、戦時1944年に戦争に反対して死刑に処された尾崎秀実の獄中から家族への手紙が、松本慎一、風間道太郎、柘植秀臣ら親しかった友人たちによって編まれ、尾崎の家族へのヒューマンな想いと日本の軍部・警察に「国賊」とされても政治的信念を貫き通した勇気が讃えられ、『愛情は降る星のごとく』はベストセラーとなって版を重ねた。（現在では今井清一編『新編 愛情はふる星のごとく』岩波現代文庫、2003）

主人公は尾崎秀実であり、ゾルゲも共産主義の闘士で、何より反ファシズム連合国の一員としてナチス・ドイツを破ったスターリンのソ連邦は敗戦後の日本でも「平和勢力」として権威があったため、尾

崎秀実の近衛内閣の動向、御前会議の決定をソ連に知らせるといふ「売国」的活動も、「裏切り」というよりも日本の将来を見据えての「愛国」的志しに発するものと受け止められた。尾崎を「売国奴」とみるか「愛国者」と評価するかで、ゾルゲ事件全体のイメージが規定された。

1949年2月の米国陸軍省発表、いわゆるウィロビー報告が、日本でも転機になった。東西冷戦が始まり、中国内戦は毛沢東の中国共産党が広大な中国大陸を統一しようとしていた。GHQの占領政策が、資本主義再建、反共防波堤のための再軍備の方向に向かい、後に「逆コース」と言われた。ウィロビー報告は、日本の警察・司法・憲兵隊記録をもとにしたながらも、ゾルゲ、スメドレー、尾崎秀実を含む「上海ゾルゲ諜報団」と、ゾルゲ、尾崎、マクス・クラウゼン、ブランコ・ブケリチ、宮城与徳の5人を中心とした「東京ゾルゲ諜報団」の双方を、英国の管理する上海工部局記録や米連邦捜査局（FBI）収集米共産党資料などを加えて再調査し、「ソ連のマスタースパイ」赤軍第4部所属ゾルゲによる「共産主義の陰謀」を詳細に論じた。

年秋
謀報
菅回
が作
検閲
の御
ある
本の
クラ
1
ちペ
の
て多
ユ!
コ1
ト
パ:
初:
年:
;
事
と
ま
ゾ
国
ル
ゲ
ル
す
央
と
楯
第
1

米国のメディアは、ウィロビーの狙い通り、スメドレーの上海でのゾルゲとの関係にスポットをあて、その「非米活動」を、エドガー・スノーやアンナ・ルイズ・ストロングら中国共産党と中国革命を肯定的に報道するアメリカ人ジャーナリストたちに広げようとしたが、発表直後のスメドレーの抗議・反撃で、一度は撤退を余儀なくされた。

日本の新聞・雑誌は、ウィロビー報告に含まれていた事件発覚端緒が伊藤律であったとする簡単な記述にスポットをあて、それをめぐる中西功・志賀義雄ら日本共産党幹部の発言等を大きく報じた。ゾルゲ・尾崎の活動も、「共産主義ソ連への忠誠」の文脈で報じられ、「ソ連スパイ」の活字が、新聞・雑誌の見出しに使われた。

伊藤律問題が、日本共産党内部の党派抗争に用いられ、伊藤が「北京機関」により監禁・投獄され27年間「スパイ」の烙印が押され続けたこと、尾崎秀樹が『生きているユダ』『ゾルゲ事件』でそれを尾崎の親族の立場から根拠付け、松本清張により通説にまで仕立て上げられたのは、前述の通りである。こうしたゾルゲ謀報団の暴露を目的にした書物は、松本清張のほかにも、多数刊行された。一度は「手違い」とされたスメドレーの上海での活動も、1950年のスメドレーの死後、49年陸軍省発表を増補したウィロビー報告決定版『上海の陰謀』(Shanghai Conspiracy, 1952, 福田太郎訳『赤色スパイ団の全貌』東西南北社、1953)が発表され、米国を席捲した1950年代マッカーシズムの嵐の中で定着し、「ソ連のマスタースパイ」ゾルゲとその上海・東京スパイ団というイメージが、今日まで世界で引き継がれる。

日本では、ウィロビーに買収された川合貞吉『或る革命家の回想』(1953)が、ウィロビー報告の上海ゾルゲ謀報団の陰謀をフィクションを加えて増幅するが、米国では、ウィロビーの下でG-2歴史課の米国側チーフを務めたメリーランド大学ゴードン・ブランゲ教授(占領期日本言論出版物のコレクションであるブランゲ文庫の収集者)が、『リーダーズ・ダイジェスト』1967年1月号誌上に「マスタ

ースパイ」(日本語版は2月号「世紀のスパイ・ゾルゲ」)を発表、没後に『ゾルゲ 東京を狙え』(Target Tokyo, McGraw-Hill Book 1984, 千早正隆訳、原書房、1985)と題してまとめられ、ウィロビー報告の基調を継承し、学術的に補完した。川合貞吉へのインタビュー、石井花子(ゾルゲの東京での愛人)、荒木光子(G-2歴史課の米国側責任者ブランゲの相手である日本側責任者荒木光太郎元東大教授の夫人で、実質的に歴史課を動かした)らのゾルゲの女性関係に関する証言が彩りをそえ、米国における支配的な「マスタースパイ・ゾルゲ」イメージを増幅した。今日でも、2002年にオープンした米国・ワシントンDCの「国際スパイ博物館 International Spy Museum」には、リヒアルト・ゾルゲのコーナーが設けられ、多くのアメリカ人、世界の観光客が訪れている。

1950年代は、反戦・反ファッショのゾルゲ事件像がくつがえされ、米国マッカーシズムの反共「ソ連スパイ・ゾルゲ」イメージがウィロビー報告により持ち込まれ、たちまち、ウィロビーの「ゾルゲ国際スパイ団」説が日本の川合貞吉や尾崎秀樹によって、それに日本共産党が伊藤律を「裏切者」「GHQスパイ」とすることによって、「国際スパイ団」としてのゾルゲ事件像が国際的に確立される過程だった。東西冷戦型情報戦であり、スメドレーや伊藤律は、その被害者であった。

1960年執筆の松本清張『日本の黒い霧』は、この冷戦型情報戦のスピーカーの役割を担い、「革命を売る男・伊藤律」をはじめとして、米国流の通説を裏側から補完する役割を果たした。著名な劇作家木下順二の戯曲『オットーと呼ばれる日本人』も1962年2月の作で、1930年代初頭の上海を舞台にしながら、大筋は川合貞吉のストーリーをベースにしている点で、すぐれた芸術性を持ちながら、史実との関わりでは歴史的限界をまねかれ免れなかった。

しかし、60年代は一方で、日本での基本的警察・司法資料をまとめた『現代史資料・ゾルゲ事件』全4巻の刊行(1962、4巻のみ1971)、他方で1964

年秋の突然のソ連政府によるリヒアルト・ゾルゲの諜報活動の公認と「大祖国戦争の英雄」としての名誉回復で、学術研究としてのゾルゲ事件研究の土台が作られた時代である。特高警察による拷問や強制、検閲があった可能性が高いとはいえ、ゾルゲや尾崎の獄中手記・上申書等も公開され、また裁判記録にあるゾルゲの発信した1941年独ソ戦開始情報、日本の御前会議での南進決定・日ソ戦回避情報のモスクワへの到達が、ソ連側により、公式に確認された。

1964年秋以降、ソ連・東独からゾルゲの生い立ちや家族関係・伝記、コミンテルンと赤軍諜報部での「英雄的」活躍が、多くの書物・論文・記事として発表され、日本でも紹介された。(イ・デメンチュウ他『同志ゾルゲ』刀江書院、1965、マリア・コレスニコワ&ミハイル・コレスニコフ『リヒアルト・ゾルゲ』朝日新聞社、1973、ウラジーミル・パニゾフスキー『ゾルゲ、世界を変えた男—ソ連で初公開された36年目の新事実』パシフィカ、1980年など)

ただしソ連側第1次史料の公開は、雑誌・新聞記事や党員証、パスポート、写真など断片的な資料にとどまった。

東独ユリウス・マダーの研究が、上海時代に始まるゾルゲと在中ドイツ人、中国人との関係に及び、ゾルゲ諜報団の活動がソ連・日本関係に止まらない国際的広がりをもつことを示した。(植田敏郎訳『ゾルゲ諜報秘録』朝日新聞社、1967、植田訳『ゾルゲ事件の真相』朝日ソノラマ、1986)

米国のウイロビー報告やプランゲらの書物が、ゾルゲを「共産主義スパイ」と反共情報戦に使おうとするのに対して、ソ連・東独側は、米国もCIA(中央情報局)をはじめとする諜報機関を世界中に張りめぐらし、ベトナムや中南米では政権転覆・傀儡政権樹立工作まで行っていることを示して、KGB(ソ

連国家保安委員会)やGRU(ソ連赤軍参謀本部情報総局)など社会主義防衛のための諜報活動の必要をアピールし、「英雄ゾルゲ」を讃え、シンボルにすることによって対抗しようとした。ゾルゲ事件は、キューバ危機からベトナム戦争にいたる時期には、典型的な東西情報戦の様相を呈した。そこでの生存者・被告遺族・関係者の証言等も、イデオロギー的に双方から利用された。

この時期に、日本で尾崎秀実の異母弟である尾崎秀樹は、『ゾルゲ事件』(中公新書、1963)をはじめ多くの書物を書き、松本清張らの大衆文学の世界とタイアップすることで、文芸評論家としての職業的地位をかためた。自説を補強する『越境者たち—ゾルゲ事件の人びと』(文藝春秋、1977)、『ゾルゲ事件と現代』(勁草書房、1982)、『ゾルゲ事件と中国』(勁草書房、1989)、『上海1930年』(岩波新書、1989)などを刊行して、ゾルゲ事件研究の「権威」となり、通俗的ゾルゲ事件像を広める役割を果たした。

尾崎秀実の友人や、娘婿である歴史学者今井清一らは、占領期の「愛国者尾崎秀実」イメージの延長上で、『尾崎秀実著作集』全5巻(勁草書房、1977-85)を刊行して、知識人・ジャーナリストとしての尾崎秀実やゾルゲの全体像を示そうとした。この面は、冷戦崩壊後、今井清一編『開戦前夜の近衛内閣 満鉄「東京時事資料月報」の尾崎秀実政治情勢報告』(青木書店、1994)、米谷匡史編『尾崎秀実時評集 日中戦争期の東アジア』(平凡社東洋文庫、2004)、ゾルゲ『二つの危機と政治 1930年代の日本と20年代のドイツ』(勝部元ほか訳、御茶の水書房、1994)、みすず書房編集部編『ゾルゲの見た日本』(みすず書房、2003)などとして公刊され、定着する。

4 ゾルゲ事件の国際的学術研究 — C・ジョンソンとディーキン=ストーリー

第1次史料をもとにした学術研究も、1960年代に開始された。この点で日本の研究者は、日本語の官

憲資料『現代史資料 ゾルゲ事件』に頼りすぎ、官憲資料を批判的に読み、海外の史資料で事件を検証

する点で、遅れをとることになった。

学術研究としてのゾルゲ事件研究は、米国の中国研究者であったチャルマーズ・ジョンソン（当時カルフォルニア大学バークレー校准教授）によって開始される。後に『通産省と日本の奇蹟』(MITI and the Japanese Miracle, Stanford UP, 1982, TBSブリタニカ, 1982)の著者として脚光を浴び、エズラ・ヴォーゲル『ジャパン・アズ・ナンバーワン—アメリカへの教訓』(Ezra Feivel Vogel, Japan as Number One, 1979, 阪急コミュニケーションズ, 1979)が日本で70万部のベストセラーになっていた時期に、ヴォーゲルとは異なる批判的視角で「日本の成功」を論じた、あのジョンソン教授である。1980年代日米経済摩擦の時期には、当代日本を「発展志向型国家」として、官僚制と産業政策による経済成長に注目し、いわゆる「レビジョニスト（修正主義者）」、対日強硬派の論客として著名になった。

ちなみにジョンソンもヴォーゲルも、共にもともと中国研究者であり、冷戦時代は米国人研究者の中国留学・滞在が困難であったために、彼らは日本で中国の史資料を集め、台湾や香港に出向いて最新情報を収集した。そのうち滞在先の日本の高度経済成長についても、アジアの経済発展の典型として研究するようになったものである。戦後の米国では、東アジアはいわゆる地域研究 (area studies) の一部であり、現地米国大使館とのつながりや潤沢な予算配分で、多かれ少なかれ政治的性格を帯びていた。冷戦崩壊後は急進的平和主義者になったジョンソンも、ベトナム戦争期の1969-73年時にCIAの資金援助を受け情報評価部のアナリストをつとめていたことを、後に自己批判的に語っている。

(Blowback : the Costs and Consequences of American Empire, Henry Holt, 2000, 邦訳『アメリカ帝国の報復』集英社, 2000, The CIA and Me, Bulletin of Concerned Asian Scholars, Vol.29, No.1)

チャルマーズ・ジョンソンの博士論文は、『中国革命の源流—中国農民の成長と共産政権』

(Chalmers Ashby Johnson, Peasant Nationalism and Communist Power: the Emergence of Revolutionary China, 1937-1945, Stanford University Press, 1962. 田中文蔵訳、弘文堂新社、1967)であった。その延長上で書いたのが、『尾崎・ゾルゲ事件—その政治学的研究』(An Instance of Treason: Ozaki Hotsumi and the Sorge Spy Ring, Stanford University Press, 1964, 萩原実訳、弘文堂, 1966)である。刊行が1964年7月1日で、ちょうど旧ソ連でリヒアルト・ゾルゲの存在が初めて公式に認められ、ソ連英雄勲章が授与される直前である。だから1990年の増補版刊行に当たって、著者チャルマーズ・ジョンソンは、「ソ連で遅ればせながらゾルゲを認めたことを初めて知った私は、ひょっとしたら私の本のせいだったかもしれないと思った」と述べている。ジョンソンは、ソ連でゾルゲ事件が公式に認知される前に、日本で刊行されたばかりの『現代史資料 ゾルゲ事件』1~3巻(みすず書房, 1962)を読み込み、1960年代初めまでに出ていた英語・日本語の文献・資料を可能な限り参照して学術書にまとめあげた。

しかし、ジョンソンの研究は、ウィロビー報告のような共産主義の陰謀・謀略をセンセーショナルに警告するものではなく、むしろ尾崎秀実やゾルゲの東アジア分析を高く評価するものであった。弘文堂訳に寄せられた「65年10月香港にて」と記したジョンソンの「日本語版に寄せて」は、『尾崎・ゾルゲ事件』誕生のきっかけを、次のように記している。

尾崎を研究した結果、中国革命に対して、彼は日本で最も理解力にすぐれ、正確な観察者の1人であり、日中戦争の悲劇が彼の生涯に反映されていると私は考えた。この戦争の影響は、今日ですら極東全域を覆う不安定な政治情勢のなかに感じることができる。私は尾崎の人物論を通して、多くのアメリカ人が知らずにいる、もっと重大な問題を伝えたい、また1952年に発表されたウィロビー将軍の扇動的な連合軍最高司令部報告(SCAP Report)の誤りを正すことができればよいと願った。

つまり、ジョンソンが注目したのは、「ソ連のマスタースパイ」ゾルゲではなく、「第2パイオリン」として扱われてきた日本人尾崎秀実とその中国革命論だった。「尾崎とゾルゲを単純にスパイと考えるなら、彼らほど知的なスパイは現代史上まずいないだろう。2人とも金が目当てのスパイなどではない。その動機は政治的なものであり、2人を見れば尾崎の方がより洗練されており、一層大胆でもあった。尾崎が日本にとって反逆者にされたのは、日本が自らぶち上げた東アジアでの運命論[大東亜共栄圏]を實現し損なったからである」というユニークな視角からの研究であった。

さらにジョンソンは、1964年初版本の時点で、日本でも広く受容されていた米軍ウィロビー報告の^{しんぴようせい}信憑性を疑い、ゾルゲ事件発覚伊藤律端緒説に距離をおいていた。「付章 伊藤律はユダだったろうか？」まで書いて、尾崎秀樹の伊藤律＝「生きてゐるユダ」説、松本清張の「革命を売る男」説に、先駆的に疑問を呈していた。そこに伊藤律が1980年に日本に生還し、伊藤律自身の証言によって、初版本でのジョンソンの疑問が解かれることになった。これが、1964年初版末尾に「追補」(Reprise,1990)を30頁近く加え、1990年にスタンフォード大学出版局から増補版を刊行する大きな理由となった。(増補版日本語新訳は、篠崎務訳・加藤哲郎解説『ゾルゲ事件とは何か』岩波現代文庫、2013)

ただしジョンソンの説は、ウィロビー報告やプランゲの「マスタースパイ」説が支配的な米国では、学術研究としては認められたが、少数説だった。また、弘文堂版日本語訳書では、学術研究では必須な原書の注解・典拠が省略されていた。ちょうど尾崎秀樹や松本清張の書物の普及、ソ連からゾルゲの英雄物語が続々刊行され邦訳された時期と重なって、アメリカ人の書いた「読み物」の印象を与えた。

1960年代にゾルゲ事件の学術的研究として評価され、今日でも国際的に最も信頼できる研究とされるのは、イギリスの歴史学者の共著であるディーキン＝ストーリィ『ゾルゲ追跡』である(F.W.Deakin and G.R.Story, *The Case of Richard Sorge*, Chatto

and Windus, London 1966、河合秀和訳、筑摩書房、1967、最新日本語訳は岩波現代文庫、2003)。欧州の戦史を研究するディーキン教授と日本史研究のストーリィ教授は、日本の『現代史資料』ばかりでなく(ジョンソンは参照できなかった)ソ連のゾルゲ名誉回復と英雄伝説誕生も見ていた。事件の全体像を、オーソドックスでバランスのとれた叙述で、すぐれた実証研究に仕上げた。注解と典拠は綿密で第1次史料を重視し、たとえば事件発覚時の在日ドイツ大使館、ドイツ外務省の戸惑った対応の叙述は、典拠は示されていないが、当時はまだ未公開の連合軍押収文書をもとに正確であった。(ディーキン教授らが編纂し、後に英国国立公文書館で公開)

ディーキン＝ストーリィは、日本の官憲史料にも米国のウィロビー報告にも距離をとり、未解明な問題は未解明とし、異説がある場合は公平に紹介した。例えば49年2月陸軍省発表への米国・メディアの「非米活動家」スメドレーへの関心と、日本のメディアの「愛国者」尾崎秀実と「裏切者」伊藤律の役割報道の違いに注目し、伊藤律問題については「この点の慎重で公正な討論については、ジョンソン『尾崎・ゾルゲ事件』参照」と注記していた。今日ウェブ辞書 Wikipedia で40カ国語近く立項されている「リヒアルト・ゾルゲ」の項で、ほとんどの言語で参考文献に挙げられているのが、このディーキン＝ストーリィ『ゾルゲ追跡』である。ただし中国語訳は、まだないようである。1996年に刊行された、イギリス The Times 紙東京支局長ロバート・ワイマント Robert Whyman の *Stalin's Spy: Richard Sorge and the Tokyo Ring* (London: I.B. Tauris Publishers, 1996、西木正明訳『ゾルゲ 引裂かれたスパイ』、新潮社、1996年)は、英国風実証主義で書かれたディーキン＝ストーリィの本のバージョン・アップ版と評することができる。

情報戦という観点からすると、ゾルゲ事件のイメージ醸成にあたって、映画やアニメの果たした役割も無視できない。斎藤武市監督の日本映画『愛は降る星のかなたに』(1956年、日活/出演:森雅之、浅丘ルリ子)は尾崎秀実『愛情は降る星のごとく』

をもとにしていたが、フランスのイブ・シャンピ監督の映画『スパイ・ゾルゲ/真珠湾前夜』(1961年、フランス・日本合作/出演：岸恵子、マリオ・アドルフ)は、ソ連で上映されてゾルゲ名誉回復のきっかけを作ったといわれた。ただしソ連崩壊後に現れたゾルゲ名誉回復の政治過程を示す資料では、マイナーな役割にすぎなかった。2003年に公開された篠田正浩監督の大作『スパイ・ゾルゲ』(2003年/出演：本木雅弘、岩下志麻、イアン・グレン)は、冷戦崩壊後の新たな解釈をもとにし、日露歴史研究センターも協力した、最新のものである。

テレビのドキュメンタリーでもたびたび取りあげられて、『NHK特集「戒厳指令 交信ヲ傍受セヨ」』(1979年)、『歴史への招待 ゾルゲ国際諜報団逮捕昭和16年』(1981年、NHK製作)、『NHK特集「ゾルゲ事件」』(1990年)、『NHKスペシャル「国

5 冷戦終焉・ソ連崩壊 — ゾルゲ事件研究のルネッサンス

1989年の冷戦終焉、東欧諸国の市民革命と民主化・自由化、1991年ソ連邦の解体・崩壊は、ゾルゲ事件研究にも、全く新しい環境をもたらした。中国も改革開放へと向かい、東西冷戦期のイデオロギー的情報戦は過去のものとなった。

ソ連崩壊に伴い、コミンテルン・ソ連共産党と各国共産党間の連絡文書など大量の旧ソ連秘密文書がアクセス可能になった。直接ゾルゲ事件に関わるものでは、崩壊期のソ連に入った日本のNHK取材班が、1939-41年期中にゾルゲがモスクワに送った90通の暗号電文を発掘し、公開した。(NHK取材班・下斗米伸夫『国際スパイ・ゾルゲの真実』角川書店、1992)

「ラムゼイ」「インソン」名でゾルゲの送った電文には、それぞれに暗号解読者・翻訳者名が記され、軍指導部に提出する際の係官の評価が入っていた。ゾルゲ自身は知らないところで、無論、日本側警察・裁判記録には出てこないかたちで、ソ連側の情報評価がなされていた。例えばゾルゲの1941年諜報活動の2大成果とされる、独ソ戦切迫の情報と御前

際スパイ・ゾルゲ』(1991年)、『その時歴史が動いた、ゾルゲ・最後の暗号電報・新資料が明かす国際スパイ事件の真相』(2003年、NHK製作)等がある。ロシアでも史実に即したテレビ・ドキュメンタリーが作られ(DVD KGB Secret Files: Spy Sorge, Russia TV,2005)、軍の教育等で使われているという。

ソ連・東独のイデオロギー的「英雄ゾルゲ」宣伝に悩まされた冷戦期の西独では、ディーキン＝ストーリィの書物の独語版が出ているが、冷戦初期の*Der Spiegel* (13. Juni ~ 3. Okt.,1951)連載特集ぐらいで、ゾルゲ事件の研究はほとんどなかった。そこで若者に参考にされたのは、日本の漫画家手塚治虫の『アドルフに告ぐ』ドイツ語訳 (Osamu Tezuka: *Adolf 4: Zwischen den Fronten*. Carlsen-Verlag, Hamburg 1983)であった。

会議による南進決定情報のうち、在日ドイツ大使館を通じて入手した前者「バルバロッサ作戦」の情報は、6月15日という開戦日の特定(実際は22日)まで入っていたにもかかわらず、「疑わしい、挑発のための電報のリストに入れるよう」と書き込まれ、ゾルゲがドイツの「2重スパイ」と疑われていたこと、スターリンに独ソ戦準備を促すことができなかったことが、公式第1次史料から、初めて明らかにされた。

他方、尾崎秀実を経て入手した日本の7月2日御前会議の情報は、赤軍参謀本部諜報部の「情報源の能力、および、前の情報が正確で信頼度の高いものであった」というコメントがあり、信憑性が認められた。9月6日の2度目の御前会議の内容は「日本の対ソビエト攻撃は、今ではもはや問題外」と対ソ参戦中止、日本軍南進・対米戦争不可避のゾルゲ情報となり、今度はスターリンも信じて、極東ソ連軍20個師団を移動させ対独戦争に投入することができた。これが、ゾルゲが1964年に「大祖国戦争勝利の英雄」に祭り上げられる最大の根拠であった。

ロシアでは、その後ロシアの研究者による新たな資料収集と研究が始まり、ゾルゲ事件に関わる第1次資料が断片的だが公開され、白井久也、渡部富哉ら日露歴史研究センターの手で、逐次日本語でも読めるようになっていく。白井久也・小林峻一編『ゾルゲはなぜ死刑にされたのか』(社会評論社、2000)には『国際スパイ・ゾルゲの真実』と重複しない12通の暗号電文が新たに公開され、日本語で収録された。

こうして1990年代から今日まで、ゾルゲ事件研究のための環境は、全く新しい段階に入った。伊藤律の問題に限っていえば、すでに1980年に中国での幽閉から伊藤律自身が奇跡的に生還し、自らの「スパイ」の汚名に回想録・証言で反駁してきたが、川合貞吉は真実を語ることなく翌81年に没し、松本清張は92年まで、尾崎秀樹は99年まで存命したにもかかわらず、『革命を売る男』『生きているユダ』説を撤回することはなかった。これには、党内抗争で伊藤を除名し中国共産党に身柄を預けた日本共産党の宮本顕治らが、「50年問題」「北京機関」を徳田球一ら分裂時の一方の派閥(分派)が行ったものとして「現在の党とは無関係」「関知せず」の態度をとりつづけたことが、大きく影響した。日中両共産党関係が中国文化大革命以来断絶し、伊藤の帰国も日本共産党は関わらないものだった。

こうした状況に対して、帰国後の伊藤律と親しく接してゾルゲ事件についての再検討を進めてきた在野の歴史家渡部富哉が、『偽りの烙印』(五月書房、1993)を公刊し、綿密な調査・聞き取りと警察・検察・裁判史料の批判的解説によって、伊藤律発覚端緒説をくつがえした。渡部は尾崎秀樹との公開討論会でも「生きているユダ」説の誤りを迫及したが、晩年の尾崎秀樹は、渡部の批判に真正面から答えることなく没した。渡部の探求はさらに、上海時代の川合貞吉証言の全体をくつがえし、川合によって名をあげられ検挙された事件関係者の冤罪を晴らす方向に向かった。例えば尾崎秀実日本帰国の事情や、尾崎の後継者が堀江邑一であったことなどを、新たに発掘した。伊藤律「スパイ」説の訂正という意味

では米国でのチャルマーズ・ジョンソン増補改訂版の方が早かったが、渡部の執念の研究は、日本の通説を塗り替え、2013年の松本清張『日本の黒い霧』改訂の土台を作った。

1997年4月には、日本の社会主義・共産主義運動史研究を長くリードしてきた(故)石堂清倫の提唱で、渡部富哉、白井久也らを中心とした日露歴史研究センターが設立され、日本のゾルゲ事件研究を、新たな段階に引き上げた。東京、ロシア・モスクワ、ドイツ・オツェンハウゼン、モンゴル・ウランバートル、アゼルバイジャン・バクー、沖縄・那覇、上海と7回の国際シンポジウムを開催し、ゾルゲ・尾崎秀実の命日である11月7日前後には東京多摩墓地で毎年墓前祭・記念講演会を開いてきた。

日露歴史研究センターの発行する『ゾルゲ事件関係外国語文献翻訳集』(2003年創刊、既刊37号)は、ロシア語・ドイツ語・英語・フランス語・中国語など世界の最新資料や論文、日本人による研究論文などを数多く収録し、現代ゾルゲ事件研究の国際センターとしての役割を果たしている。また国際シンポジウム記録や新発見資料が単行本にまとめられ、白井久也・小林峻一編『ゾルゲはなぜ死刑にされたのか』(社会評論社、2000)、白井久也編『国際スパイ・ゾルゲの世界戦争と革命』(社会評論社、2003)、白井久也編著『米国公文書ゾルゲ事件資料集』(社会評論社、2007)などが、刊行されている。

冷戦崩壊後、旧ソ連秘密資料の公開ばかりでなく、第2次世界大戦から半世紀以上を経て、米国国立公文書館のナチス・日本帝国戦争犯罪記録の機密解除をはじめ、英国国立公文書館、ドイツ連邦公文書館などでも、ゾルゲ事件に関する第1次資料が公開されるようになった。例えば米国国立公文書館には、米国陸軍情報部が占領期に収集した大量の要監視人物個人ファイルがある。ゾルゲ事件の関係者として、尾崎秀実、川合貞吉、秋山幸治、田口右源太、宮西義雄、マクス・クラウゼン、スメドレー、駐日ドイツ大使館オット大使、リリー・アベク、リスナー、マイジンガーらの個人ファイルが保存されていた。戦前特高記録にはない、ジャック木元(宮城与徳供

述の米国共産党「ロイ」＝木元伝一）、豊田令助（宮城供述の矢野努・武田）、石島栄、藤井周而、安藤次郎らが、ゾルゲ事件との関係でGHQから監視・調査・尋問されていた。ただし、関係者である松本三益、堀江邑一、中西功らのファイルは、ゾルゲ事件とは無関係の戦後の政治活動についてのものであり、野沢房二（上海での尾崎秀実の信頼した協力者、当時東亜同文書院教授）、ウルズラ・クチンスキー（上海でのゾルゲの助手ソニア）や中国共産党のゾルゲの協力者陳翰笙、王学文らのファイルはなかった。

英国国立公文書館には、共同租界の上海工部局の1929-33年当時の記録のほか、晩年のアグネス・スメドレーが英国諜報機関によって監視された記録が残されていた。同時期の上海ゾルゲ諜報団と関連する中国共産党顧順章事件、ヌーラン事件の膨大な記録も、米国や英国の公文書館で機密解除になっている。

国際的な研究の面では、例えば上海時代を含むアグネス・スメドレーの伝記は、定評あるMacKinnon, Janice and Stephen R. MacKinnon. *Agnes Smedley: The Life and Times of an American Radical* (Berkeley: University of California Press 1988、ジャニス・マッキンノン/スティーヴン・マッキンノン共著『アグネス・スメドレー 炎の生涯』石垣綾子・坂本ひとみ訳、筑摩書房、1993年)の後にも、Ruth Price, *The Lives of Agnes Smedley* (Oxford: Oxford University Press, 2005)、ドイツ語の論集 Surhone et al., *Agnes Smedley* (Betascript Publishing, 2011) が刊行されており、もともと東独で出ていた上海時代のゾルゲの助手であったウルズラ・クチンスキー（著名な東独の歴史家ユルゲン・クチンスキーの実妹）の上海時代の回想を含む『ソニア・レポート』(*Sonya's Report: Fascinating Autobiography of One of Russia's Most Remarkable Secret Agents*, Chatto & Windus 1991) が、「ベルリンの壁」崩壊後、ドイツ語・英語で再版された。(中国語訳、ルート・ヴェルナー『諜海の思い出』張黎訳、解放

軍文藝出版社、2000)

統一後のドイツでは、もともと中国近代史の研究者で *Mao Zedong, Zhou Enlai and the Evolution of the Chinese Communist Leadership* (Nordic Institute of Asian Studies, 2002 by Thomas Kampen, 杉田米行訳『毛沢東と周恩来』三和書籍、2004) の著者であるハイデルベルク大学トーマス・カンペン教授が、1930年代の上海、特にゾルゲを支えたドイツ人、ドイツ語圏に留学して帰国した中国人について、*Chinesen in Europa - Europäer in China: Journalisten, Spione, Studenten* (Gossenberg: OSTASIEN Verlag, 2010) など、精力的な研究をハイデルベルク大学(海徳堡大学漢學系)のホームページから発信している。

http://www.zo.uni-heidelberg.de/sinologie/institut_e/staff/kampen/

そのいくつかは、『ゾルゲ事件関係外国語文献翻訳集』に日本語訳が収録されている。

長らくウイロビー報告やプランゲの本が支配的だった米国でも、2009年にジョンソン、プランゲに続く3冊目のゾルゲ事件研究書、米国日本文学研究の権威であるトーマス・ライマー博士の編んだ『愛国者であると共に反逆者、ゾルゲと尾崎』(Thomas Rimer, *Patriots & Traitors, Sorge & Ozaki*, Portland, Merwin Asia 2009) という学術論集が刊行された。ちょうどチャルマーズ・ジョンソン逝去(2010)の直前であったが、木下順二『オットーと呼ばれる日本人』を全文英訳して収録したこの本に再録され、論集のベースになったのは、ウイロビー報告でもプランゲの本でもなく、それまで異端であったチャルマーズ・ジョンソンの尾崎秀実論であった。米国でも、「ゾルゲ事件ルネッサンス」とも呼ぶべき、新段階のゾルゲ事件研究が始まったようである。

これら「ゾルゲ事件ルネッサンス」のなかで、特に重要に思われるのは、日本語では白井久也編『国際スパイ・ゾルゲの世界戦争と革命』(社会評論社、2003)に、ロシア語から訳出された、アンドレイ・フェュン『秘録 ゾルゲ事件 発掘された未公開

文書』である。これまでの公開資料に加え、ゾルゲがコミンテルン勤務中の手紙と東京から赤軍情報部に送った暗号電報など186通が新たに公開された。

また、トーマス・カンペン教授の在中国ドイツ人たちの研究は、ゾルゲが上海で頼りにした中国でのドイツ人ネットワークが、川合貞吉がフィクションをまじえ誇大に供述・回想する日本人反戦ネットワークよりもはるかにゾルゲに密着し、上海租界の欧米エリート層に食い込み、ドイツ語圏から帰国した中国共産党員とも結びつき、ゾルゲがモスクワに戻り東京に移っても連絡をとっていたのではないかという、新たな問題を提起した。

かつて西ドイツの週刊誌 *Der Spiegel* の 1951 年夏の連載特集に出ていた上海時代のゾルゲの協力者で経済情報に詳しい謎のドイツ人「Dr. Voigt (フォイクト博士)」を、ディーキン=ストーリーは「ジューメンスの上海代表者の 1 人」と推定していたが、カンペン教授は、ウルズラ・クチンスキー『ソニア・レポート』に出てくる Walter (ヴァルター) と同一人物で、当時ドイツ最大の電気会社 AEG の上海支社長ヘルムート・ポイト (Helmut Woigt) と特定した。しかもそれは、ゾルゲの助手をつとめたソニア=ルート・ヴェルナー=ウルズラ・クチンスキーの夫であった建築家ルドルフ・ハンブルガーの友人で夫妻の住居 (ゾルゲの連絡に用いられた) の家主であったこと、上海租界の数々のヨーロッパ風建築と都市計画を手がけたハンブルガーとその友人の建築家リヒアルト・パウリク、パウリクの友人でジューメンス中国支社長ジョン・ラーベらが、上海で反ヒトラー・ドイツ人のネットワークを持ち、ゾルゲがヌーラン事件での身分発覚を恐れて上海を逃れ、東京に赴任したのちも、経済情報でゾルゲとつながっていたのではないかというのである。

このうちハンブルガー夫人=ウルズラ・クチンスキーは、ゾルゲや尾崎秀実の通った上海「ツァイト・ガイスト (時代精神) 書店」の女主人イレーネ・ワイデマイアー姉妹と親しく、ゾルゲの推薦で赤軍の諜報員となり、満州国などで数々の功績をあげ、イギリスに渡って物理学者クラウス・フックスを協

力者にし、後の英米原爆製造「マンハッタン計画」の情報、フックスからソ連に渡るきっかけが作られることになったようだ。1度も検挙されることなく戦後は東独に住み、兄の経済学者ユルゲン・クチンスキーと共に東独社会主義建設に貢献したという。ソ連で2度叙勲し、その歴史的役割はゾルゲ以上と評されている。

夫のハンブルガーも、妻ウルズラと離婚した後、やはり赤軍 GRU 諜報員となり、トルコ、イランなどで諜報活動を行ったが、イランのテヘランで検挙され、捕虜交換で渡ったソ連では「2重スパイ」の疑いをかけられ、不幸な生涯を終えたそう。ハンブルガー夫妻の友人パウリク、ポイト、ラーベらは、在中国ドイツ人社会で重要人物とされ、ビジネスのためにナチス党に入党したが、彼らは実は本国のヒトラー独裁に反対であった。1937 年 12 月南京での日本軍による中国人虐殺の目撃者となった、当時ナチス党南京支部副支部長、ジューメンスのジョン・ラーベの日記は著名で、近年日本軍の南京大虐殺を証言する映画「ジョン・ラーベ」(2009, 中国では上映されたが、日本では非公開) の主人公となった。

また、日本の特高資料にも出てくる「ツァイト・ガイスト (時代精神) 書店」の女主人イレーネ・ワイデマイアーの夫は、ドイツ留学帰りの中国共産党員呉照高で、中国の李立三路線批判からモスクワ帰りの王明路線への転換、中国共産党顧順章事件、ヌーラン事件の時期、ゾルゲが中国共産党の路線問題・組織問題にも関わったことを示唆している。この点は、ロシアでも『ゾルゲ事件関係外国語文献翻訳集』にミハイル・アレクセーエフ「あなたのラムゼー中国におけるソ連軍事諜報機関 1930-1933 年」が掲載され、ゾルゲが中国からモスクワに送った電文が使われており、日本の研究では看過されがちで、上海でのゾルゲとドイツ人社会との関係、中国共産党との関係の解明の必要を示唆している。

「ゾルゲ事件ルネッサンス」の歴史資料と諸研究から浮かびあがったいまひとつの問題は、米国共産党研究の重要性である。冷戦崩壊後、いわゆる旧ソ連秘密文書の大きな部分が米国に渡った。そこで編

募されたソ連・コミンテルンと米国共産党の関係資料集『アメリカ共産主義の秘密の世界』(The Secret World of American Communism, Yale UP, 1995, 邦訳『アメリカ共産党とコミンテルン』五月書房、2000)、『アメリカ共産主義のソヴェト世界』(The Soviet World of American Communism, Yale UP, 1998)には、コードネームを使ってであるが、在中国の PPTUS (汎太平洋労働組合書記局) や宮城与徳についての交信文書が出てくる。それもそのはず、米国共産党の 1930 年代の指導者は、アール・ブラウダー書記長をはじめ、多くがアジアでの PPTUS の活動経験を持っていた。彼らはソ連共産党と中国共産党・日本共産党との秘密連絡の中継点であり、宮城与徳が米国共産党日本人部から派遣されたばかりでなく、ゾルゲがモスクワから横浜への渡航途中でソ連赤軍からの指令や活動資金を受け取るのも、米国共産党経由であった。上海でゾルゲと頻りに会っていたコミンテルン極東局政治部長ゲアハルト・アイスラー(極東局組織部長はヌーランことヤコブ・ルドニク)は、ゾルゲが東京で活動していた時期にコミンテルン派遣の米国共産党担当顧問だった。つまり、上海や東京でのゾルゲ諜報団の活動を裏で支え、OMS (コミンテルン国際連絡部) のパスポート偽造や資金送付・連絡ルートを提供し秘密工作を進めるさいに、世界のあらゆる人種・民族から共産主義者を集めている米国共産党は、格好のカバーとなった。

このことは、米国国内のソ連エージェントとモスクワとの暗号交信記録を解読した『ヴェノナ』(Venona: Decoding Soviet Espionage in America, Yale UP, 1999, 邦訳 PHP 研究所、2010) によっても裏付けられる。そこにも宮城与徳が出てくる。また旧ソ連の KGB 高官パーベル・スドブラートフの回想(『KGB 衝撃の秘密工作』ほるぷ出版 1994)も、別のかたちでモスクワからの宮城与徳工作を述べている。『ヴェノナ』を読むと、「ソ連のスパイ」は、必ずしも各国共産党員である必要はなかった。むしろ共産党籍を持たない実業家・官吏やジャーナリストである方が普通で、諜報戦に役立つとされて

いた。アグネス・スメドレーは宋慶齡工作などに登場するが、米国共産党員ではなくてもブラウダー経由で資金援助を得ていた。

米国西海岸の日本人・中国人など移民労働者たちの労働運動・革命運動を発掘した Josephine Fowler の博士論文 *Japanese & Chinese Immigrant Activities: Organizing in American International Communist Movements, 1919-1933* (Rutgers University Press, 2007) にも、宮城与徳ら米国共産党日本人部のゾルゲ事件との関わりが出てくる。不幸にして博士論文出版後まもなく病没した Josephine Fowler のロシア語・中国語・日本語を含む収集資料は、今日カルフォルニア大学ロサンゼルス校 (UCLA) ヤング史料図書館で公開されており、そこには、ゾルゲ事件に関わる膨大な第 1 次史料が含まれている。

宮城与徳を米国共産党から日本に派遣した「ロイ」をハワイ出身の木元伝一=ジャック木元と特定したのは、旧ソ連秘密文書から木元ファイルを発掘した渡部富哉の業績であるが、筆者は、米国議会図書館の米国共産党ファイルから、上海で尾崎秀実をゾルゲに最初に紹介したのは、裁判判決文にいうスメドレーではなく、尾崎が当初供述していた米国共産党日本人部の鬼頭銀一であることを明らかにした。米国共産党日本人部でゾルゲ事件に関わったもう 1 人の重要人物、謎の指導者豊田令助(党名矢野努、武田など)については、UCLA の Josephine Fowler Papers に手がかりが残されており、彼が戦時 OSS (米国戦略情報局、CIA の前身) に関わった記録も現れてきた。

ゾルゲ事件は、日中戦争・第 2 次世界大戦時の情報戦だった。無線電信での暗号連絡や街頭での口頭・文書連絡が用いられ、その仲介で検挙され生命を落とす犠牲者も多かった。

戦後のゾルゲ事件報道も、情報戦だった。新聞・雑誌・書物や映画・テレビを通じて、一方での「愛国者尾崎秀実」「ソ連英雄リヒアルト・ゾルゲ」の反ファッショ・イメージ、他方での「共産主義マス

タースパイ」「アグネス・スメドレーの非米活動」「伊藤藤律の裏切り」等の反共イメージが各国でつくりられ、競われてきた。つまり、ゾルゲ事件は、戦前日本における軍国主義化・対ソ戦争の可能性をめぐる日ソ情報戦であったにとどまらず、戦後のゾルゲ事件報道・研究を含む各国での事件の取りあげ方が、それ自体情報戦であった。ゾルゲ事件をどのような視角からどのように回顧し記憶するかについては、各国・各情報機関、個々の研究者の狙い・思惑があり、それらがグローバルな国際情報戦として展開した。

単純化していえば、米国では、1930年代初めの中国・上海でのゾルゲ・グループが、東京での活動の準備期として注目され、ゾルゲ事件と在外アメリカ人・米国共産党のつながりが重視された。今日でも事件は、冷戦期スパイ合戦・反共マッカーシズムの文脈でイメージされる。日本では、1930年代後半の軍国主義化と尾崎秀実の近衛内閣中枢にあっての活動が「愛国者か、反逆者か」で注目される。ソ

連の場合は、1941年のゾルゲ情報に焦点を合わせ、大祖国戦争でロシアを救った英雄としてとりあげる傾向が今日でも強い。

しかし、ここにもグローバル化の波が押し寄せてきている。今日、国際情報戦としてのゾルゲ事件報道・研究の主戦場は、インターネットの世界に移りつつある。米国の「エシユロン」「PRISM計画」のような広域的諜報活動で電話盗聴、電子メール・ツイッターなどビッグデータが分析され、個人の思想信条まで検閲・監視されている。他方でゾルゲ事件についての各国史料館の史資料所蔵状況、新しい研究の情報は、たちどころに世界中で共有できる時代が到来している。たとえば以上に述べた筆者の研究の多くは、「加藤哲郎のネチズンカレッジ」HPに公開され、渡部富哉のゾルゲ事件と中国に関わる研究は「ちきゅう座」HPで、世界中から容易にアクセスして閲覧し、ダウンロードできるようになっている。

6 ゾルゲ事件と中国—21世紀に残された課題

このように見えてくると、重要な当事国の1つである中国が、これまでのゾルゲ事件報道・研究の主舞台の1つでありながら、第1次史料が乏しく、研究史上の空白になっている。どうやら中国では松本清張の推理小説ほどにはゾルゲ事件は知られていないようである。

楊国光は、元中国新聞社東京支局長で、白井久也、渡部富哉らの日露歴史研究センターの成果を採り入れて、中国でのゾルゲ事件研究を牽引している。『諜海巨星左爾格』（上海学林、2002）、『理查德左爾格—一個秘密諜報員の功勳和悲劇』（漢語大詞典、2005）をもとに、自ら日本語でまとめたのが日本語版『ゾルゲ 上海ニ潜入ス』であり、最近も『功勳与悲劇-紅色諜王左爾格』（中国青年、2012）を刊行している。

『ゾルゲ 上海ニ潜入ス』については筆者も書評を書いたが、陳翰笙『四个時代的我（4つの時代の私）』（1988年、中国文史出版社）にもとづくゾル

ゲと経済学者陳翰笙の緊密な関係の解明、周恩来・潘漢年ら中国共産党の諜報機関「中共中央特科」の存在と、周恩来・ゾルゲ秘密会談の話など、典拠は第1次史料ではないが、重要な問題を提起している。

（渡部富哉は、ゾルゲ手記に出てくる「ワン」を経済学者王学文とした事実誤認等をも指摘している）

また、この楊国光の書物に示唆を受け、日露歴史研究センターは、方文回想録『中国におけるゾルゲ事件』（国家安全部弁公庁情報史研究処、1988）を入手・訳出し、『ゾルゲ事件関係外国語文献翻訳集』第27号以下に掲載した。方文は回想録の中で、中国でのゾルゲの助手としての活動を具体的に述べた。これによって、ゾルゲの供述に出てくる謎の中国共産党員「ワン」が、王学文でも陳翰笙でもなく、方文である可能性が高まった。第29号から訳載されている「ソニア・レポート」、ミハイル・アレクセエフ『あなたのラムゼイ』、第35-36号の老拙「中国映画〈東風雨〉の歴史的背景」等と共に、上海時代

のゾルゲ諜報団を読み解く大きな手がかりとなった。また、1930-33年期の上海ゾルゲ・グループの活動と、1941年の東京ゾルゲ諜報団検挙、中国での中西功・西里龍夫、尾崎庄太郎らの抗日活動と「中共諜報団」事件が、具体的に結びつけられた。中西らの抗日諜報活動は、『中国秘密戦—中共情報・保衛工作紀実』（金城出版、2010）などでも取りあげられているようである。

こうして日本では、ゾルゲ事件を、15年戦争（1931-45年）期全体を貫くファシズムと戦争に対する反ファシズム・反戦の運動、日本の侵略と東アジアの民族・植民地解放、それをめぐる各国軍・政府・諜報機関の国際情報戦の中で、改めて研究する機運がうまれている。その資料的条件も、着実に整ってきている。

その中で大きな困難が、中国の歴史檔案館史資料の未公開である。例えば、①楊国光のあげるゾルゲと周恩来の会見は本当にありえたのか、周恩来・潘漢年らの中国共産党中央特科の組織と活動はいかなるものであったか、②上海のゾルゲは中国共産党内の路線問題や顧頤章事件、ヌーラン事件にいかに関わったか、③陳翰笙、王学文らの個人資料の中にゾルゲ事件関係の記録や回想は残されていないか、④中国共産党内にも31年日中戦争開始期や41年ゾルゲ事件・中共諜報団事件発覚時には「中共日本人部」があったと思われるが、その資料は残されていないか、⑤それは戦後の日中関係、「北京機関」等と関わりがあるのかどうか、等々の課題が未解明である。今回の上海シンポジウムを機に、あくまで学術ベースでの交流から、資料公開へと進むことが期待される。

最後に、これまでも国際情報戦であり、今後もそうならざるをえないであろう、ゾルゲ事件研究を21世紀に進展させるために、いくつかの全般的課題に共同で取り組む必要を、述べておく。

第1に、ゾルゲ事件は、1941年の日ソ開戦に関わる狭義の諜報戦としてのみ見られるべきではなく、20世紀前半の世界的な戦争と平和、帝国主義と植民地獲得競争、侵略と民族自決・解放の大きな文

脈の中で、解明され、評価されるべきであろう。

日本でのゾルゲ事件発覚・検挙についていえば、当時の日本の特高警察・陸軍憲兵隊が企図した思想・言論弾圧、企画院事件、中共諜報団事件、満鉄調査部事件、横浜事件等、戦争に反対する平和主義者・自由主義者への弾圧の一環として研究されるべきであろう。

第2に、狭い意味での「スパイ事件」研究につきまとうのは、米国のマッカーシズムや旧ソ連のスターリン粛清、中国の文化大革命などに大規模に現れ、多くの生命が奪われたように、あれこれの個人や集団を証拠もなしに「スパイ」「裏切り者」「分派」「人民の敵」などとレッテルを貼り、家族・遺族にまで及ぶ人権侵害になりうる問題である。1人の「スパイ」の摘発には、多くの冤罪が付きまとう。また最も成功した「スパイ」とは、ゾルゲ事件関係者ではソ連の原爆スパイを発掘したウルズラ・クチンスキーのように、誰からも疑われず、実際の歴史を動かした、時に無名の人物であることも否定できない。「ゾルゲ事件」を、特高警察やウィロビー報告の「マスタースパイ」の物語から解き放ち、現代史の学術研究のなかで、実証的に明らかにしていくべきである。

第3に、情報戦においても、それぞれの時代と研究・環境条件によって、ナショナルな色彩が付きまとうことは、避けられない。第2次世界大戦後の各国でのゾルゲ事件報道・研究・評価には、それぞれの国で直面する時代の課題や、国内での政府諜報機関・共産党内諸分派間の情報戦が反映されてきた。21世紀のインターネット時代においても、それはある程度避けられないが、互いの立場とおかれている位置を尊重しつつ、可能な限り情報を公開・交流・共有し、共通の事実認定、見解・評価をつくっていくことが望ましい。今回の上海国際紅色情報戦国際シンポジウムが、そのような研究交流の機会となることを期待したい。

次号予告

21世紀に入り、国際関係は再び、「新帝国主義」的な構造転換を遂げつつあります。その中で、インテリジェンス（諜報・情報）が占める位置が着々と肥大化の道を歩んでいます。弱肉強食が激化の一途をたどる今日の「新帝国主義」を支えているのは、国益などが激しくぶつかり合う「諜報戦



上海師範大学の学生（胸にゾルゲの顔）の皆さん
上海シンポでは、大変お世話になりました！

左から2人目は、渡部富哉氏
9月17日、川田博史撮影

争」です。その主体を占めるのは、秘密諜報員が暗躍する情報収集や工作活動で、米国特殊機関によるイスラム過激派の首領オサマ・ビン・ラディンの殺害や、日本人が多数犠牲となったアルジェリアの天然ガス施設占拠事件も、決してこの例外ではありません。メルケル独首相の携帯電話の盗聴疑惑に端を発した米国諜報機関による世界的規模の秘密活動などは、言語道断で、絶対に許してはならないことです。

こうした今日の激動化する諜報戦争の現状とその底流を理解するためには、1930 - 40年代のゾルゲ事件との類似的（アナロジカル）解釈が必要となります。日露歴史研究センターは、今年5月18日（土）、わが国におけるインテリジェンス研究の第一人者と目されている作家で、元外務省主任分析官である佐藤優氏を講師にお招きして、「新帝国主義下の諜報戦争」という演題で、特別講演会を開きました。次号にその講演録音テープを起こして、全文収録します。どんな報告や論議が行なわれたか、詳しく紹介します。ご期待下さい。

ゾルゲ事件関係外国語文献翻訳集

No.38

2013年 12月10日 発行

発行・編集

日露歴史研究センター事務局

連絡先

〒215-0005

神奈川県川崎市麻生区千代ヶ丘4-17-5

川田博史

Tel/Fax 044-955-8068

頒価700円

※禁無断転載・コピー